

(様式6-2)

## 研究成果概要

所属学校名 鈴鹿市立白子中学校

職・名前 教諭 平井 智子

- 1 事業の名称 教育臨床内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学 教育学部
- 3 研究主題 中学校におけるより良いチーム援助とは  
—そのシステムとコラージュによる個別の支援—

### 4 研究成果の概要

**I 研究の背景** 現在の中学校現場では、いじめ、不登校、非行をはじめ、障がいの多様化、重度重複化への対応、コミュニケーションが苦手な子どもの増加等、特別支援教育の充実発展には多くの課題がある。これらの課題への対策として、「より効果的なチーム支援体制」と「充実した個別の支援」が必要であると考え、次の3つの調査を行った。

#### II 調査1 中学校現場の教職員を対象としたアンケート調査

2013年7月、県内公立中学校10校の管理職、教員、養護教諭を対象に、支援チーム構成意識、課題、期待などについての調査をした。対象者388名のうち、回答を得られたもの340名について、集計、分析を行った。その結果、支援チームが学年集団、生徒指導担当教員が中心となって構成される特性が確認でき、スクールカウンセラーの活用、チーム支援体制に対する意識の向上等の課題も明らかになった。

#### III 調査2 支援にかかわる専任教員への聞き取り調査

2013年6月から11月にかけて、各専任教員の役割を明らかにするとともに、特別支援教育を様々な角度から捉えることを目的に支援室職員、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、養護教諭、学識経験者を対象に半構造化面接を行った。その結果、各支援室の支援体制の相違、校内委員会の重要性、キーパーソンとしての特別支援教育コーディネーターが学校全体の動きを把握し、各専任教員や関係機関をつなぐパイプ役としての役割をすることが、校内支援体制に大きな意味を持つことなどが明らかになった。

#### IV 調査3 コラージュ制作を取り入れた授業実践

言語によらない手法でのアプローチから、中学生の感情の表出とコミュニケーションの促進をはかり、個別の支援やコンサルテーションへの活用の可能性を考察することを目的とした。2013年10月から2014年2月にかけて、別室登校生徒1名（全6回）、特別支援学級在籍生徒3名（全10回）、通常学級生徒33名（全3回）を対象に、コラージュ制作を取り入れた授業実践を行った。その結果、個人法によるコラージュ制作がラポール形成の一助となったことが確認できた。また、コラージュがあらゆる発達段階の生徒に対して有効であり、コミュニケーションを促進させる働きがあることが分かった。また、集団法によるコラージュ制作で生徒の感情がポジティブに移行する結果が得られた。

#### V まとめ

より良いチーム援助システムの構築には、生徒ひとりひとりを、あらゆる側面から適切にアセスメントすることが重要である。そのため、校内委員会の充実やきめ細かい個別の支援は生徒の援助に大きな意味がある。このことから、集団法による学級全員を対象としたコラージュ制作を取り入れた授業は有効であると言える。